

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04611

研究課題名(和文) 地域に根ざした環境文化の世代間継承に関する環境教育研究 - 奄美群島の集落を事例に

研究課題名(英文) Environmental education study on succession of the land-based environmental culture between generations - Case study in villages of Amami Islands

研究代表者

小栗 有子 (Oguri, Yuko)

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授

研究者番号：10381138

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、人間形成における自然環境の関わりの影響を解明することを目的に、奄美群島の集落で生きる／生きてきた青年を中心に地域認識の獲得過程を解明する研究方法の開発に取り組んだ。成果として、暮らし(生業や集落行事など)に埋め込まれた自然と主体との関わりを取り出す指標開発とそれを用いたライフヒストリー調査の世代間と地域間の比較法を開発した。また、この方法を用いて調査した結果、青年たちは、自然環境と関わる中で自然とのつき合い方の知識と技能を身体的に獲得し、それが地域への愛着形成と環境文化の継承に結びついており、地域の社会経済構造の変化や個人の生育・職住環境の違いが作用することを試論的に導きだした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の環境教育研究では、これまで民俗学や民間伝承の研究分野扱ってきた民衆の古い生活や文化を研究対象にすることは稀であった。そのため環境教育研究は、都市に対して人と自然環境との日常的付き合いが密な農山村漁村の暮らしのもつ人間形成力に十分注目してこなかった。一方、英語圏の環境教育研究では、西洋社会とは異なる人間形成の体系を有する先住民社会に根ざした教育を先住民環境教育としてとらえ直し、その価値の再評価が進んでいる。本研究は、先住民環境教育との類似性を明らかにしつつ、日本で消失が懸念される地域固有の文化にみられる人間形成力を再評価し、現代に生かすための研究に着手するものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate the acquisition process of the local recognition of young men who live or lived at village of the Amami islands and to develop research method to elucidate the relation of natural environments in the character building. As an outcome, I developed both indexes to draw out the essence of relationship between individual and nature embedded in the daily life, and the comparative method between different generations and places. Using this method, I found out that through connection with nature, young men acquire knowledge and skills physically to get along with natural surroundings. This acquisition is tied to the development of young men's attachment formation to the place and succession of the environmental culture. Another finding was that the differences of the change in local social economic structure, the condition of personal growth, and environment of the occupation and livelihood influence the acquisition process.

研究分野：環境教育研究

キーワード：先住民環境教育 奄美 人間形成 土着知 身体的学び wild pedagogies 環境文化 世代間継承

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の環境教育研究は、これまで環境危機に対応する実証主義的で実践的な研究に重点が置かれ、批判主義的な社会科学的研究が少ないという指摘がなされてきた(野村康, 2015)。一方、英語圏を中心とする環境教育研究では、実証主義、解釈主義、批判主義の三つの認識枠組み(パラダイム)の立場からの研究が進展しており(原子栄一郎, 2010)、90年代に入ると文化相対主義の研究が加わっている。

文化相対主義的研究は、西欧社会とは異なる人間形成の体系を持つ先住民社会への着目に始まり、植民地による同化政策の問題に加えて、若者世代の自然との関わりの喪失が、先住民文化の危機とアイデンティティの喪失を招き、「文化」の継承・存続が環境教育研究の主要な関心事にシフトしていることを示す(Korteweg and Russell, 2012)。

本研究は、日本において主流になっている実証主義的で実践的な研究に対して、自然環境との関わりを通じた人間の全面的発達(人間形成)を扱うことを環境教育研究の主題にしていくための研究方法を開発していくことを目的に開始した。

本研究のアプローチとしては、日本でも2000年代に入り、民俗学や人類学の知見によって裏付けられる近代以前の人間と環境との直接的な関わりを環境教育の原型として捉える研究が立ち上がっていることに注目し(安藤聡彦, 2014; 小栗有子, 2016)、文化相対主義的研究を日本の文脈に即して展開する方法を構想した。すなわち、人間形成における自然環境との関わりの影響について、学校教育という範囲だけではなく、暮らしの中(生業や遊び、集落行事など)に埋め込まれたインフォーマル教育やノンフォーマル教育の中に見出し、取り出していく研究のアプローチである。

なお、本研究の課題設定の前提には、教育学研究以外の「環境」を冠する学問(環境経済学や環境社会学など)では、学問体系の中に自然環境を取り込み、学問自体をやり直す試みがなされてきているのに対して、環境教育研究の場合は、環境諸科学と教育を結びつける研究が主流で、教育学研究をとらえ直す主題(問い)としての自然環境の扱いが希薄であるという課題意識があり、自然環境を取り込んだ環境教育研究に発展させる必要性への意識が動機になっている。

2. 研究の目的

本研究は、人間形成過程においてこれまで顧みられてこなかった自然環境との関わりの影響の解明を目的に、日本における環境教育研究の新たな研究方法の開発を目指すものである。具体的には、1953年まで米軍統治下にあったため地域開発が日本の本土より遅れ、人の暮らしと希少種動植物が密接に関わる環境文化を誇る奄美群島の集落を事例に、その土地に生きる、又は、生きてきた青年たちの地域認識の獲得過程を世代間の比較を方法論として用いて解明を試みる。また、本研究とカナダ先住民環境教育研究の比較分析による研究方法の枠組みの検討を行う。

3. 研究の方法

(1) 自然環境の中における人の育ちを捉える指標の作成

指標の作成にあたっては、民俗学や生態人類学等の知見を整理し、人と自然との関わりを捉えるキーストーンとなる指標を精選するとともに、教育学の「自己形成論」等の研究から自己形成における自然環境との位置関係について検討し、で選定した指標を教育学研究の視点から再構成する。

(2) 調査対象とする奄美群島内の地域・集落選定を行う

対象設定にあたっては、奄美群島、および、地域・集落について、県誌・市町村誌・集落誌・個人史等の資料収集と分析により、社会経済開発史の時期区分と自然・地理特性との関係を検討したうえで行う。あわせて、奄美群島における「環境文化」の内容の検討を行う。

(3) ライフヒストリー調査の実施

(1)で作成した指標に基づくヒアリング項目を設定し、(2)で選定した地域・集落において、世代間比較できる対象者を抽出し、ライフヒストリー調査を実施する。

(4)奄美群島を事例とする本研究とカナダ先住民環境教育研究の比較分析を行い、環境教育研究の方法開発の枠組みの検討を行う。

4. 研究成果

(1) 自然環境の中における人の育ちを捉える指標の作成

民俗学や生態人類学等の知見の整理と指標の精選

民俗学や生態人類学等の知見で参考にした主な論者は、篠原徹、安室哲、松井健、倉島哲、嘉田由紀子、鳥越皓之などである。ここでの検討は、人と具象としての自然環境との関係を捉える要素(環境的自然素材)や関係性(認識レベル・共同性レベル・作用レベル)をつかめただけでなく、人間形成を見ていく際のキーストーンとなる身体性の問題が浮かび上がった。

なお、本研究の成果の一部は、小栗有子(2018)「環境教育研究における「身体性」論不在の問題」日本環境教育学会研究大会として発表した。

教育学研究の視点からの指標の再構成

人の成長に自然環境が与える影響を教育研究として捉えていくうえで参考にしたのが、宮澤康人(西洋教育史)の教育関係の社会史的(巨視的構造的)見方と、高橋勝(教育哲学)の文化変容における子どもの自己形成空間の変容であった。宮澤の研究からは、環境を改変するという

人間の本性を踏まえて自然が人に与える影響ではなく、人の自然への関わり方(人間の環境形成のあり方)に注目することの有効性を、高橋の研究からは、世代によって主体と自然環境の関係を規定する社会構造に違いがあり、人間形成におけるミメシスパラダイム、開発パラダイム、自己選択パラダイムは、ライフヒストリー調査の項目設定、2)の調査地・対象者の選定などその後の研究を進めるうえで重要な指標となった。

なお、本研究の成果の一部は、小栗有子(2017)「暮らしに埋め込まれた人と自然の関わりから「環境教育」を紡ぐ」日本環境教育学会研究大会として発表した。

「身体性」を媒介にして と と接続する

ここでは、「自然・環境と人」(松井健、篠原徹、安室知、嘉田由紀子、鳥越皓之)の関わりと「身体」(野村雅一、生田久美子、佐々木正人、竹内敏晴)との関連性、さらには、「教育」(江淵一公、綾部恒雄、田嶋一、大田堯)を接続させる理論構成を検討した。その結果、個人が属する地域社会全体の変容に対して、個人の変容を捉えていくことや、無意図的な人間形成機能が教育的に組織されていくことことに着眼する必要があることが見えてきた。

なお、本研究の成果の一部を下記において発表した。

小栗有子(2018)「環境教育研究における「身体性」論不在の問題」日本環境教育学会研究大会
Oguri, Y. (2019) How can we tie the Embodied knowledge of elders' to current environmental education? Case of indigenous environmental education in the Amami Islands, Japan. In: *World Environmental Education Congress*.

(2) 調査対象とする奄美群島内の地域・集落等の選定

収集した資料とその分析により、対象地域・集落等の選定基準を以下のように定めた。

- ・奄美大島全体の「地域特性に応じた生態系モデル」を網羅する。
- ・奄美大島の中のへき地を網羅する(半島の先端:笠利、龍郷、住用、宇検、瀬戸内、加計呂麻島、与路島、請島)。
- ・名瀬市街地の新旧の多様な人材を対象とする。
- ・社会変動(生活様式の変化・地域ごと変動は異なる)と世代を考慮する:若者(10代~40代前半)、壮年(40代後半~60代前半)、高齢者(65歳以上)。

(3) ライフヒストリー調査の実施

ライフヒストリー調査を実施した主体は以下の通りである。数字は、調査を実施した人数を示す。

対象区分	高齢者	壮年	若者
生態系モデル	7	7	7
へき地	11	0	9
名瀬市街地	4	3	4
政界・実業界	5	5	3
第一次産業	2	3	1
文化・教育	6	6	6

ライフヒストリー調査で用いたヒアリング項目の構成の概略は以下のとおりである。

幼少期における海・川・山・里(集落)との関わりを問う

(生業・食糧・料理・保存法・火・水・日常の道具・素材・移動手段・行事・結ワーク・祭り・信仰・暦・方言・自然への恐れ等)

幼少期に海・川・山・里(集落)との関わり方を誰にどのように教わったか

(祖父母、両親、兄弟、近所の兄・姉、近所の叔父さん・叔母さん、集落、又は、学校の同級生・先輩・後輩(同年代・異年齢))

青年期~成人期における以下の点:海・川・山・里(集落)との関わり(幼少期との違い)、島を離れて気づいたこと、帰郷することへの思い・決断、帰郷後について

本研究の成果の一部は、書籍『奄美大島の環境文化・100人(仮称)』南方新社から2020年度中に発行する予定である。なお、本調査は、鹿児島大学鹿児島環境学研究会の研究事業の一貫として実施したものである。

(4) カナダ先住民環境教育研究との比較分析による研究方法の枠組みの検討

日本の“Indigenous environmental education”の「発見」

文化相対主義的環境教育研究を日本の文脈で展開していくためにカナダを中心とする先住民環境教育の研究成果との接点を探った。その結果、先住民環境教育研究における西洋社会と先住民社会という関係構図と、日本の高度経済成長以降の社会と日本の伝統的社会という関係構図を類比できることを発見した。その類比により土着的知の体系と身体的学びという、本研究において極めて重要な認識枠組みを導き出すことが可能となった。

なお、本研究の一部は、下記において発表した。

Oguri, Y. (2017) Significance and possibility of “indigenous environmental education” research from Japanese context -new method and approach. In: *World Environmental Education Congress*.

Oguri, Y. (2018). Modern Education in Japan. In Jickling, B., Blenkinsop, S., Timmerman, N., Sitka-Sage, M. D. eds. *Wild Pedagogies*, Palgrave Macmillian.

人新世時代の環境教育研究としての Wild pedagogies の展開

脱植民地教育理論の応用理論が先住民環境教育研究に結実したとすると、2014 年頃から新たに人新世時代の教育を脱構築していく概念装置として“wild pedagogies” (Bob Jickling) が提唱された。2018 年には、wild pedagogies の概念を深めるの 6 つの試金石 (touchstones) が示され (Jickling *et al.*, 2018)、本研究の理論的枠組みを強化することが可能となった。

なお、本研究の成果の一部は、ジャーナル Education Policy に“Challenges and Possibilities for re-wilding education policy in Japan”として、2020 年度中に掲載される予定である。

(5) まとめ

本研究は、人間形成における自然環境の関わりの影響を読み解く環境教育研究の方法開発を目的に、奄美群島の集落で生きる / 生きてきた青年を中心に地域認識の獲得過程の解明に取り組んだ。研究の結果、暮らし (生業や遊び、集落行事など) に埋め込まれた自然と主体との関わりを取り出す指標開発とそれを用いたライフヒストリー調査の世代間と地域間の比較法を開発した。この方法を用いることで、幼少期における海、川、山、里などの自然環境との関わり方の量と質が、身体的な記憶として残り、年を重ねるなかでそれらの経験に新たな意味づけがなされ、変化を遂げながら地域認識が形成されていく過程が見えてきた。この過程を再解釈すれば、青年たちは、自然環境と関わる中で自然とのつき合い方の知識と技能を身体的に獲得し、それが地域への愛着形成と環境文化の継承に結びついており、地域の社会経済構造の変化や個人の生育・職住環境の違いが大きく作用しているという仮説を立てることが可能である。

今回開発した研究方法により、人間形成における自然環境の関わりの影響は、自然とのつき合い方の知識と技能の獲得、並びに、主体の地域認識形成に及んでいることが試論的に導き出すことができた。今後は、自然とのつき合い方の知識と技能の獲得過程をより実証的に明らかにするとともに、その獲得により影響を受ける地域認識の構成要素 (環境意識や共同体意識など) との関係を読み解き、環境形成主体として発達・成長過程の実相に迫っていくことが課題である。

参考引用文献

安藤聡彦 (2014) 環境教育組織論覚書, 高野孝子編, *地域に根ざした教育-持続可能な社会づくりへの試み*, 海象社.

原子栄一郎 (2010) 環境教育というアイデアに基づいて環境教育の学問の場を開く, *環境教育*, 19(3), pp. 88-101.

Jickling, B., Blenkinsop, S., Timmerman, N., Sitka-Sage, M. D. eds. (2018) *Wild Pedagogies*, Palgrave Macmillian.

Korteweg, L. and Russell, C. (2012) Decolonizing + indigenizing = moving environmental education towards reconciliation, *Canadian Journal of Environmental Education*, 17, pp. 5-14.

野村康 (2015) 日本における環境教育研究の特徴と課題, *環境教育*, 25(1), p. 82-96.

小栗有子 (2016) 「地域」の視点から環境教育学を構想する. 今村光章編, *環境教育学の基礎理論*. 法律文化社, pp.164-179.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 小栗有子
2. 発表標題 環境教育研究における「身体性」論不在の問題
3. 学会等名 日本環境教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小栗有子
2. 発表標題 暮らしに埋め込まれた人と自然の関わりから「環境教育」を紡ぐ
3. 学会等名 日本環境教育学会第28回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Oguri Yuko
2. 発表標題 Significance and possibility of "indigenous environmental education" research from Japanese context : new method and approach
3. 学会等名 9th World Environmental Education Congress (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小栗有子
2. 発表標題 内なる自然 から環境教育を考える
3. 学会等名 日本環境教育学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Oguri Yuko
2. 発表標題 How can we tie the Embodied knowledge of elders' to current environmental education? Case of indigenous environmental education in the Amami Islands, Japan
3. 学会等名 10th World Environmental Education Congress (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Bob Jickling, Sean Blenkinsop, Nora tmmerman, Michal De Danann Sitka-Sage, Vivian Wood-Alexander, Victor Elderton, Joyce Gilbert, Yuko Oguri, Anrea Welz	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 140(122-124)
3. 書名 Wild Pedagogies	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----